

Vol. 9
2017年
秋・冬号

上町台地 今昔タイムズ

企画・編集：U-CoRoプロジェクト・ワーキング 発行：大阪ガス エネルギー・文化研究所 (CEL)
問合せ先：tel.06-6205-3518 (担当：CEL 弘本) ※U-CoRo=ゆーころ (上町台地コミュニケーション・ルーム)
http://www.og-cel.jp/project/ucoro/index.html

「上町台地 今昔タイムズ」とは

わたしたちが暮らす「上町台地」。古代から今日まで絶えることなく、人々の営みが刻まれています。天災や政変や戦災も、著しい都市化も経験しました。時をさかのぼってみると、まちと暮らしの骨格が浮かび上がってきます。自然の恵みとリスクのとらえ方、人とまちの交わり方、次世代への伝え方……。過去と現在を行き来しながら、未来を考えるきっかけに、U-CoRoプロジェクト第2ステップでは、壁新聞「上町台地 今昔タイムズ」を制作いたします。

それは、上町台地が海に囲まれていた遠き日のこと。ここは、世界に開かれた最先端の“知”の港でした。時は下り、近世・天下の台所となった大坂では、出版文化が大きく花開き、庶民に実学や教養や楽しみを届け、時代に先駆ける“知”の開拓者たち、名だたる文人や学者を輩出しました。やがて、近代・大坂は、新たな社会を支える“知”を集め、広めるための施設や媒体を、次々に生み出していきました。戦前・戦後の上町台地を揺りかごに、大作家も誕生しました。けれど、社会の転変に、“知”の舟は翻弄もされ……。これからの大阪に、再び人々を引き付けてやまない、魅力に富んだ“知”を編んでいくために。上町台地の水際にはじまる、本のまち・大阪の軌跡をたどる旅に出ましょう。

和本の木版印刷

江戸～明治時代の和本は、木の版に文字や絵を反転で彫った版木に墨を付けて和紙に摺り、本にした。この木版印刷は、明治時代初期(1880年頃)まで一般的に行われていた。

■本のまち・大阪 Chronicle

593 (推古天皇元) ★ 四天王寺建立
645 (大化元) ★ 難波長柄寺造営
754 (天平勝宝6) ★ 鑑真が難波到着
770 (宝亀元) ★ 神武天皇が百万塔陀羅尼(現存する日本最古の印刷物)を法隆寺・東大寺・四天王寺など十大寺に奉納

1364 (延享19) ★ 堺で『論語集解』出版(向來による民間出版「堺版」の現存最古)
1583 (天正11) ★ 秀吉が大坂築城
1615 (慶長20) ★ 大坂夏の陣、豊臣氏が滅亡

1673 (延享13) ★ 井原西鶴『生玉万句』出版、俳書刊行盛んになり、大坂で出版が活発に

1682 (享保2) ★ 西鶴の『好色一代男』初版出版①。この頃から江戸・大坂で出版が活発に

1690 (元禄3) ★ 契沖が『万葉集』注釈書『万葉代匠記』を著す

1703 (元禄16) ★ 近松門左衛門の『曾根崎心中』竹本座で初演

1712 (享保20) ★ 寺島良安が『和漢三才図会』編集②

1723 (享保8) ★ 大阪で本屋仲間公認(京都1716年、江戸1721年)、初版を納める御文庫が住吉大社に(のちに大阪天満宮にも)つけられる

1726 (享保11) ★ 幕府が懷徳堂を官許の学問所とする③

1766 (明和3) ★ 大坂紙商仲間が組織される④

1776 (安永5) ★ 上田秋成『月物語』刊行(京都 梅村判兵衛・大坂 野村長兵衛の合同)

1802 (享和2) ★ 蔵書版(兼葎堂版)を多数発刊した木村兼葎堂没

1800 (寛政12) 頃 ★ この当時、大坂に貸本屋約300軒⑤

1820 (文政3) ★ 山片蟠桃が『夢の代』を完成

1835 (天保6) 頃 ★ 平享銀鶴の見聞記『浪花雑誌街通』に、心斎橋筋の5.6町に40～50軒の本屋あり、この規模の本屋街は江戸にもない⑥

1837 (天保8) ★ 大塩平八郎の乱

1838 (天保9) ★ 緒方洪庵が蘭学塾・適塾を開く

1854～59 (安政頃) ★ 鏡成『摂津名所図会大成』に心斎橋筋の書店街は「巨商の書肆多く、舖前には新古の諸書をならべ、棚箱には数萬の巻冊を詰めたり、されば朝より注文をせる童奴かまびすしく」と記載⑦

江戸期～明治初 本を求め人が集う 書店街

心斎橋筋には本屋がずらり

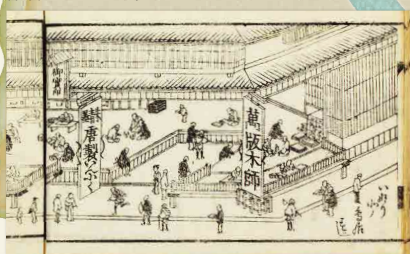
本屋は京都に現れ、主に仏典・漢籍などを扱いました。やがて寛文(1662～73)頃より大坂でも出版が盛んになり、本屋も次々生まれ、大坂は流通の中心にもなりました。当時世界最高水準の庶民の就学率(寺子屋)の高さ、懷徳堂をはじめとする高度な知の拠点としての私塾の存在、先鋭の芸能文化を育む風土、文物が集散する都市機能が、出版と流通を支えていました。心斎橋筋一帯は日本一の本屋街と呼ばれ⑥、全国各地からさまざまな階層の人々が集う知の交流の最前線となっていたのです。



幕末の地誌『摂津名所図会大成』『浪速叢書8』1928年所収)に描かれた心斎橋筋の書店の賑わい。本を求めた武士の姿も見られる。⑦

本をめぐる 職人の世界 版を彫る、紙に摺る、本に仕上げる

江戸時代の本屋は、本の出版から小売までを一手に担っていました。その隆盛にともない、江戸時代中期には多くの版木彫りや版摺り、表紙仕立の職人たちが本屋のまわりに集まります。一つの産業としての分業体制がしっかりと築き上げられていました。



弘化3(1846)年刊『大阪商工銘家集』に描かれた「摺物所(南久宝寺町中橋角 松岡利兵衛)」の店頭には「萬版木師」の看板。大阪市立図書館デジタルアーカイブより

はじまりは上町台地 “知”を運ぶ 本のまち・大阪の 軌跡をたどる

大坂に登場した 人気作者

西鶴・近松で活気つく出版界

井原西鶴の浮世草子『好色一代男』が天和2(1682)年に大坂で誕生。大坂・江戸で刊行され、庶民の間で大人気となりました①。これは出版界にとっては革命的な出来事。その後、大衆向けの実用本や浮世草子が人気を博するなか、浄瑠璃作品の近松門左衛門が登場。彼の浄瑠璃本も大坂で出され、やがて京や江戸でも人気を博し、後世に残る名作の数々を生み出した。

店には新刊本・古本・役者絵も 版元を兼ねる 本屋も多数

大坂くらしの今昔館内に復元された江戸時代の大坂の本屋の店先。情報発信の最先端を担った生業の姿を今に伝える。写真提供：大坂くらしの今昔館

心斎橋筋にあった書林「つるが屋」の引札(江戸時代末)。大阪市立図書館デジタルアーカイブより

上町台地で編まれた百科事典

江戸時代の絵入り百科事典『和漢三才図会』の板彫(板木屋)の図(国立国会図書館デジタルコレクションより)。同書を編集した寺島良安の書斎・杏林堂は高津神社の北の南瓦屋町にあったともいわれる②。



井原西鶴『本朝桜陰比事』の挿絵中に描かれた貸本屋。本を背負い顧客を回った。

海を渡り来たった 大陸からの書籍が到着した地・ 上町台地

上町台地は大陸からの文物が渡り来たった場所。彼の地で編まれた書物が数多く船に乗せられ運ばれてきました。貴重な書物はその後受け継がれ、写され、寺院等では新たな本づくりも行われます。それは、のちの時代の事業としての出版にもつながっていききました。

「おそろかなことに、地もまたうごく。私どもは、思うことができる。この駅に立てば、台地のかたに渚があったことを。」に始まる、司馬遼太郎の詩「大阪城公園駅」の中に、次の言葉がある。

「遠くつ國々の船は初が帆をなめなめにして松屋町筋の白砂に近づき、この駅舎のあたりの入江のいづれかへ石の碇(いかり)を沈め、内典(いん)・外典(がい)の書籍を積みおろしたにちがいない。思想の書、詩の書、工芸の書。……」

古き時代、大陸からの数多の書籍が船でこの地にもたらされたことが想起される。

蔵書版も発行した 学問所

写真は明治8(1875)年刊の田中華城著『画本大阪新繁昌詩』の版木と紙面(大阪大学大学院文学研究科所蔵)。江戸時代中期に大坂の商人たちが今の中央区今橋三丁目に設立した学問所・懷徳堂③に残されていたもの。(WEB版閲覧 http://kaitoku.do.jp/ 参照)

蔵屋敷に 全国の蔵紙 東横堀川周辺などに集まった紙屋

江戸時代の本づくりになくてはならないのが和紙。各藩で特産化が進められた和紙は、米と同様、全国から中之島にあった諸藩の蔵屋敷に運ばれてきました。これらは蔵紙と呼ばれ、大坂の紙屋が扱い全国にも流通。船での運搬に便利のため、大坂の紙屋は東横堀川周辺などの北船場に集まっていたそうです④。この紙が近世の“知”の創造・出版文化を支えたのです。



広がる読者層と 貸本商法

人気本を顧客に届ける新しい仕組み⑤

江戸時代後半になると、まちに本屋が増え、本はより庶民にも身近なもの。とはいえ、やはり本は高価なものでした。そこで重宝されたのが貸本屋。京都で始まり、商都大坂で拡大、やがて江戸でも盛んになりました。貸本屋は百軒もの得意先を回り、読みたい人は「見料」(本の値の約6分の1)を払って借りするという仕組み。当時、多くの庶民が仮名などの文字が読め、大衆向けの娯楽的な読物が人気を呼びました。

本のまち・大阪 Chronicle

- 1868 (慶応4明治元) ★大阪初の新聞「内外新聞」創刊(週刊)
- 1870 明治3 ★本木昌造が大阪活版所開設
- 1871 明治4 ★大阪活版所が廃藩置県の書類印刷(翌年、新暦3万部印刷)
- 1875 明治8 ★「大阪錦絵新聞」創刊/後藤象二郎設立の蓬萊社が中之島で洋紙生産開始/初の日刊新聞「浪花新聞」創刊(活字印刷)
- 1876 明治9 ★「大阪日報」が創刊(「大阪毎日新聞」の前身)
- 1879 明治12 ★「朝日新聞」が創刊
- 明治初期 ★出版社・書店の兼業から、専業の取次会社が出現
- 明治中頃 ★出版物の目録による通信販売が広がる
- 1894 明治27 ★日清戦争開始
- 1900 明治33 ★住友家が大阪府に図書館建物寄付を申し出/本木昌造銅像を印刷業有志が四天王寺に建立
- 1901 明治34 ★宮武外骨が「滑稽新聞」を大阪で創刊
- 1903 明治36 ★大阪で第5回国内勸業博覧会開催
- 1904 明治37 ★日露戦争始まる/大阪図書館が開館(のちの府立中之島図書館)
- 1906 明治39 ★漫画雑誌「大阪パック」発刊
- 1908 明治41 ★「滑稽新聞」が10月日録号を出し廃刊、11月に「大阪滑稽新聞」を再刊
- 大正初期 ★立川文庫大ブーム
- 1919 大正8 ★大原孫三郎が大原社会問題研究所を設立
- 1921 大正10 ★市内4区の小公園に市立図書館を設置
- 1922 大正11 ★大阪朝日が「旬刊朝日」「週刊朝日」の前身、大阪毎日が「サンデー毎日」創刊/プラトン社が「女性」創刊
- 1923 大正12 ★関東大震災/プラトン社「苦菜」創刊
- 1925 大正14 ★藤澤桓夫ら同人誌「土馬車」創刊/大阪市が市域拡張/大阪都市協会が「大阪」創刊
- 1931 昭和6 ★南木芳太郎らが郷土雑誌「上方」を創刊(この頃獨逸研究誌の創刊)★
- 1933 昭和8 ★梅田・心斎橋に地下鉄開通/創元社から谷崎潤一郎の「春琴抄」(著者自装の豪華本)出版
- 1941 昭和16 ★織田作之助らが同人誌「大阪文学」創刊/全国取次を日本出版配給(日記)に統合/太平洋戦争終結
- 1945 昭和20 ★空襲で市内大部分焼く/ボツダム宣言受諾
- 1947 昭和22 ★手塚治虫の「新寶島」初版発表/大阪都市協会が「大阪人」創刊(2012年休刊)
- 1949 昭和24 ★取次の日記解体
- 1950 昭和25 ★大原社会問題研究所跡に府立図書館天王寺分館開館(のち夕陽丘図書館)
- 1959 昭和34 ★辰巳ヨシヒロらが「劇画工房」結成
- 1961 昭和36 ★大阪市立中央図書館開館(1996年建替開始)
- 1968 昭和43 ★「上方芸能」第1号発行(2016年200号終刊)
- 1970 昭和45 ★日本万博開催
- 1971 昭和46 ★日本初の情報誌「プレガイドジャーナル」創刊
- 1973 昭和48 ★同人の研究者が「大阪春秋」を創刊
- 1985 昭和60 ★大阪府印刷工業組合が本木昌造像元
- 1995 平成7 ★阪神淡路大震災
- 2004 平成16 ★直木三十五記念館が地域の有志の手で開館

木版印刷から活版印刷へ

明治 五代友厚・本木昌造と大阪活版所①

近代社会は、活字による「知」の普及によって急速に進展していきました。文明開化の当初には、まだまだ木版印刷が主流だった日本で、いち早く活字版印刷の必要性を喝破し、明治3 (1870) 年に国内初の民間活版印刷所を長崎に開いた本木昌造。これに注目した五代友厚(後の大阪商工会議所初代会員)は、本木を大阪に招き、同年、現在の中央区大手通2丁目に「大阪活版所」を開設、ここから大阪・日本の近代印刷が始まりました。廃藩置県の布告書類や太陽暦から、新聞・雑誌・書籍へ、多彩な印刷媒体が大量につくれるようになったのです。



大正13年頃の大阪⑧

背景の「大阪市パノラマ地図」(美濃部政治郎、大正13・1924年)は、モダン大阪の市街を描いた鳥瞰地図。発行翌年の4月には、大阪市は周辺の町を合併して面積181km、人口211万人となり、当時の東京市を上回り、「大阪」の時代を迎えた。地図提供:大阪くらしの今昔館

はじまりは上町台地 “知”を運ぶ本のまち・大阪の軌跡をたどる

若き直木三十五 本に出会う 少年の人生を変えた? まちの貸本屋④

直木賞に名を残すこの作家は、明治24 (1891) 年に生まれ、現在の安堂寺町2丁目で育ちました。子どもの頃は近所の貸本屋で、「いかに、私は多くの講談本を読んだか?」と自著にも記すほどのめり込みよう。中学生になると、今度は中之島の図書館通いが始まったそうで、本との出会いが彼の人生を変え、直木文学の原点となりました。

女性を対象に モダンな情報発信 プラトン社創始の地⑦

大正時代に化粧品会社の中山太陽堂をスポンサーに設立されたプラトン社(現在の谷町5丁目が創始の地)。女性読者層をねらった文芸誌の「女性」を大正11 (1922) 年に出し、翌年は「苦菜」を創刊。山六郎や山名文夫らによる華麗なデザインで一世を風靡した。小山内薫が「女性」の編集を担当、「苦菜」の編集には直木三十五や川口松太郎が携わった。



本のまち「大阪」があった 大正 戦前

青少年文庫・女性誌・図書館・貸本屋

この時代、大阪では多彩な分野の雑誌が発行され、また立川文庫などが青少年向け読物でも先鞭をつけるなど、独自の出版文化が展開されました。「大大阪」が唱われたこの当時、近代的な図書館設置なども進められましたが、同時に多くの貸本屋がまちのあちこちに現れ、読者層も新たに大きく広がりました。



ヒーローに大熱狂 立川文庫

青少年を虜にした文庫本シリーズ③

大阪の陣の真田幸村や猿飛佐助の大活躍などに、全国の青少年が胸躍らせ、一大ブームとなったのが立川文庫。これは立川文明堂(当初、心斎橋筋博労町北)が明治44 (1911) 年から刊行した講談風読物シリーズで、後年の少年雑誌や漫画本ブームの先駆ともなりました。



『太閤記 巻参 豊田秀吉』1912年、『真田郎党忍術名人 猿飛佐助』1919年。国立国会図書館デジタルコレクションより

司馬遼太郎 少年 館の蔵書を読破

糧となった、図書館で本を乱読した日々⑥

戦前、南区の公園内にあった御蔵跡図書館に日々通い、蔵書に読みふける少年がいました。彼、福田定一君こそ、後年の大作家・司馬遼太郎その人。大正12 (1923) 年に浪速区で生まれ、自宅から上宮中学校、次いで大阪外国語学校への通学途中にあったこの図書館に、彼は出征の頃まで通いつめ、その蔵書をばば読み尽くしたそうです。時空を超える構想力はここで培われたのです。



御蔵跡図書館 (大阪市立図書館一覽) 1926年より

松屋町から始まった 戦後 手塚治虫の世界

赤本漫画から天才が羽ばたき劇画も生まれた

戦後復興に際して、多くの紙会社が集まったのが松屋町界隈でした。ここで、当時統制外の再生紙・仙花紙を使って作られたのが、表紙の赤色が目立つ「赤本」と呼ばれた漫画本。昭和20年代初め、当時大阪大学医学部の学生だった手塚治虫は、中之島にあった大学での授業が終わると、橋の下で着替え、松屋町に向かったそうです。この界隈には、手塚の初期の漫画を発行した育英出版や東光堂などが存在。手塚はここから「新寶島」「メトロポリス」など初期作品数十冊を世に出し、やがて漫画界のスーパースターとなって、時代をリードする表現世界を切り拓いていきました。



復刻版の「新寶島」(小学館)の表紙。初版は育英出版から昭和22 (1947) 年に出され、戦後日本漫画の発祥点とされる。原作・構成は酒井七馬、作画が手塚治虫。

本のまち・大阪の ~平成 明日は何処に

21世紀の開かれた“知”を編むために

異なる「知」を携えて、さまざまな人が集まり・交わり、新たな「知」を生み出す。そのダイナミズムこそ、都市の創造力の源泉です。上町台地の水際にはじまる、本のまち・大阪の軌跡をたどる旅が、まざまざと教えてくれました。今日、本の形や流通の形も激変しています。けれども、古今の「知」をストックし、最先端の「知」を編み出し、次の時代に手渡していくこと。一連の知的営みを発展的に支えていく場や媒体を、まちの中にしっかりと組み込んでいく必要性は、流動化する社会の中で、むしろ高まっているといえるでしょう。本のまち・大阪の新たなページを開くときです。

私の思い 新しい世界との出会いの場、これから!

中越慈子さん(天王寺区泉南地域の住人) まる歩の案内で四天王寺を訪れた際、本木昌造の碑の前に印刷関係の方が集まっているのを見かけました。この地が秘める歴史と文化の深さを改めて感じました。私自身の本の記憶と云うと、子ども時代、細谷の貸本屋に行ったことが、親が近所の本屋から毎月配本を児童文学全集を取ってくれていたことなど。その頃は読書家でもなかった私ですが、中学生の時に学校の図書室で宇野浩二さんの『青春の季節』に惹かれて手に取ったのが、今江祥智さんの『海の日記』に引き込まれたのが、その切っ掛けのようです。いざいざと読み始めました。今江さんは大阪の島之内の出身、代表作は『ぼんぼん』の主人公は大阪の小学生で、大阪弁の会話が印象的な作品。私にとって、独特の軽妙さ、そして魅力のな作品。これは新しい世界と出会う、そのための私は児童文学や絵本の興味が深まっていくなりました。

私の思い ことばの森で、心と身体をつなぐ力を育む

槁狼星さん(堀江地区の住人) 10年前に現場活動を始めるとき、私は図書館のような本に囲まれ、先を走らなくてはならなかった。並ん木本棚は、まちの中の森、動物が集まる場所のイメージ。歴史や路地の文化をもつ空間のあり方、同じくまちの生き方と暮らす方においても多様な価値観があったらいい。最近の日本では競争的な価値に重なる傾向が強く、なり、競争を重んずる感覚は弱まっているように感じる。ここが、苦しさを感じている子どもも増えているように。私が目指すのは、彼らがそこにいるだけで許される場所。今、子どもたちと落語や歌などの表現活動にも取り組んでいる。落語や語り、人から聴かせる面白さ、口から発せられることばは自然に身体性を帯びてくる。それが表現行為の基となる。そうした感覚を磨くことは、身体と心を豊かに育むことにつながるのだと私は信じている。

※参考文献:吉川登編『近代大阪の出版』(創元社2010)、『なわ出版事情』(大阪市立博物館第113回特別展1989)、『大阪印刷百年史 本支』(大阪府印刷工業組合1984)、今田洋三『江戸の本屋さん』(日本放送出版協会1977)ほか

※上の年表に挙げた以外にも、大阪では様々な出版事業が展開されてきました。ここではその一部を取り上げ表示しています。